

自来也英雄物語

マルドリ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

NARUTO大好き！ヒロアカ大好き！ジャンプ大好き！な作者の妄想です。

神様のミスで死んでしまった主人公が、NARUTOの自来也の力を持って僕のヒーローアカデミアの世界で楽しむ。

目次

プロローグ	1
キャラ設定（※ネタバレ注意）	5
1話	9

プロローグ

「事の始まりは中国の軽慶市、”発光する赤児”が生まれたという
ニュースだった！」

以降、各地で『超常』は発見され、原因も判然としないまま時は流
れる。

いつしか『超常』は『日常』に、『架空』は『現実』に!!!

世界総人口の約八割が何らかの”特異体質”である超人社会と
なった現在！ 混乱の渦巻く世の中で！ かつて誰もが空想し憧れ
た一つの職業が脚光を浴びていた！

そんな世界に転生することになりました。はい。

「なにを言っとるんじやお主は」

「いやナチュラルに心読むなよ」

「だってわし神やし」

そう言っつて、胸を張りドヤ顔をしている爺さんは、本当に神様らし
い。

なんで本物の神様が目の前にいるかと言うと、俺は死んでしまっ
たらしい。

しかも、目の前にいるこいつのミスで。

それで、他の神様にバレないように他の世界へと記憶を持ったまま
転生させて、証拠隠滅しようってことらしい。

「おっほん、さつき言った通りじゃが、お主には僕のヒーローアカデミ
アによく似た世界へと転生してもらおう。

そのまま何も与えずに転生させる訳には行かないからの。お主の世界で言う特典とやらを5つ、自由に決めて欲しいんじゃないよ」

「5個もいいのか、それじゃあ1つ目は個性についてかな。」

NARUTOにでてきた忍術全て使えるようにして欲しい」

「ん、先程自由と言ったが少し訂正しようかの。世界のバランスを崩すような強大な力はなしとさせてもらおうかの」

「え、それじゃあさっき言ったのはダメなのか？」

「いや、NARUTOの忍術じゃと、血継限界、血継淘汰、月経網羅や飛来神の術などは使えんが、五大性質変化とその他の影分身などの忍術は使えるようにできるの」

「なるほど、それじゃあ少し変えて自来也をベースにして、さつき神様が言ったような感じにして欲しい」

「わかった。して、なぜ自来也なんじゃ？」

「NARUTOで1番かっこいい人だからだよ」

「なるほどのお」

「それじゃあちやつちやと残りの4つも決めちやいますか。」

2つ目は、NARUTOの自来也をもうちよつとだけイケメンにしたような容姿にしてほしい。

3つ目は、完全記憶とまではいかないでも、普通より高い記憶力が欲しい。

4つ目は、転生する前にNARUTOにでてきた忍術の印の練習を一通りさせて欲しい」

「よしわかった。その3つは特に問題はなく叶えることができよう。それより、思ったよりスラスラでてきたの？」

「まあ、こういう事を夢見て色々妄想してきましたから」

「お主、よっぽどの厨二病じゃのお」

「ははっ、まあな」

「して、最後の1つは何にする？」

「最後の1つももう決めてあるんだ」

「ほう」

「最後の特典は、死ぬ前の家族を幸せにして欲しい。宝くじでも当

たつて、長生きして、死ぬ時に少しでも後悔がないようにして欲しい」
「ほっほっほっ、あいわかった」

満面の笑みで神様は、最後の特典を聞きいれてくれた。すると、
先程まで飄々とした感じであつたが、突然真剣な雰囲気になつた。

「お主には悪い事をした、生き返らせてやりたいのじやが、さすがに
それは違反中の違反。神の中でもそれなりの権限を持つワシにも
できんことなのじやよ」

神様は本当に申し訳なさそうな、今にも泣き出してしまいそうな表
情で俯いてしまった。

「はははっ、気にすんなって！ 夢にまで見た異世界転生、それもチー
ト能力付きでできるし。家族の幸せも約束してくれたし、まあ、死
んだのは少し辛いけど、新しい人生、楽しんでくるさ！」

ふと見ると、俯いている神様の肩が少し震えていた。

「ふおっふおっふおっふお！ 久しく見ぬ強き人間よのおお主は」

勢いよく顔を上げ、声高々とそう言い放つた神様は、右の人差し指
を立て、くるりと小さく円を描いた。

そうすると、ゴゴゴゴと大きな音を鳴らせながら、目の前の地面か
ら、白と金の豪華な両開きの扉がせり出してきた。

それと同時に、俺の右側へ白いソファ、大きなテレビ、そして山の
ように積まれた本が乗った木製の机が、どこからともなく現れた。

「お主が決めた特典の3つ目、高い記憶力はもう既に付与された。

4つ目の特典はは、そこにある本とテレビを使って学ぶといい。

気が済むまでここにいていい。100年程度なら他の神にもばれ

んじやろう。

もう転生してもいいかなと思ったなら、その扉を開いて中に入るだけじゃ。

- ▪ それじゃあ、存分に第二の人生楽しんでおくれ」

キャラ設定（※ネタバレ注意）

： 主人公

【名前】 鬼武辻 頼弥きぶつじ らいや

【性別】 男

【年齢】 主人公と同じ

【誕生日】 11月11日

【星座】 さそり座

【血液型】 B型

【趣味】 カラオケ、歌

【好きな食べ物】 鶏の唐揚げ

【嫌いな食べ物】 生野菜

【身長（高校入学時）】 193・4cm

【体重（高校入学時）】 87・6kg

【容姿】

髪： NARUTOの自来也と同じ

顔： NARUTOの自来也をもう少しイケメンにした感じ、目の下の赤い線はある

体： 少しがっしりめで野生の獣のような小さな筋肉群まではつきり見える程絞られた肉体

【個性】

” 仙忍”せんにん

・ NARUTOの自来也をベースに仙術、五大性質変化、その他口寄せの術や影分身などの忍術を使うことができる。チャクラの量はナルトや尾獣なみ。

・ 木遁は使える（ごく都合主義&作者の好み）

・ 血継限界、血継淘汰、血継網羅は使うことができない。それ以外の肉体改造が必要な術（地怨虞やデイダラの起爆粘土を作る口など）以外はすべて使うことができる。

・ 飛雷神の術と医療忍術も使えない。桜花掌程の力はないが、それなりの身体強化は使える。

・NARUTO作中の仙術は、チャクラを貯めるために時間がかかるが、この作品では自然エネルギーなんてものは無いので、貯める時間はなく瞬時に仙人モードになれる。ただ、チャクラと体力はめっちゃ持っていられる。

・NARUTOの自来也は仙人モードが苦手で、蛙のようになってしまいが、この作品では蛙に近づくにつれ強化されていく。NARUTO作中での、自来也の姿（顔と手足が蛙っぽくなる）で止まる。それ以上は、完全に蛙化したり、石化したりはしない。

・口寄せは蝦蟇のみ。NARUTOで出てきた蝦蟇は全て契約している。

・幻術は原作の自来也が苦手なため使えない。ただし、NARUTO作中で、フカサクとシマの合唱を介して使う『魔幻・蝦蟇臨唱』は唯一使うことができる。

【戦闘服】

・NARUTOの自来也が着ている服（だいたい全部一緒だと思うけど、強いて言うならペインと戦っていた時のもの）

【備考】

・転生後、喋れるようになってからはずっと自来也の喋り方。そっちの方が楽しい。

・一人称はワシ

・原作知識は高い記憶力のおかげで八割ほど覚えている。細かいところは曖昧な部分がある。（人の名前や個性など。ヒロアカのストーリーの流れはだいたい覚えている）

・使えない術

血継限界、血継淘汰、血継網羅、飛来神の術、幻術、封印術、医療忍術、桜花掌、肉体改造が必要な術（地怨虞や起爆粘土など）、転生忍術、八門遁甲、超獣偽画、秘伝忍術、尾獣の力が必要な術（我愛羅の砂など） e t c .

： 母親 ：

【名前】 鬼武辻きぶつじ 撫なで

【性別】 女

【年齢】 43歳

【誕生日】 8月2日

【星座】 獅子座

【血液型】 B型

【容姿】 NARUTOの綱手そのまま

【個性】

”気”

・ 生命エネルギーを操り、身体強化をしたり、回復をしたりすることができる。

【備考】

・ 元プロヒーロー”綱手”

・ 出産のためヒーローを引退

： 父親 :

【名前】 鬼武辻きぶつじ 路千ろち

【性別】 男

【年齢】 44歳

【誕生日】 10月27日

【星座】 さそり座

【血液型】 B型

【容姿】 BORUTOの大蛇丸

【個性】

”口寄せの術”

・ NARUTOの口寄せの術

・ 蛇を口寄せすることができる

【備考】

・ プロヒーロー”大蛇丸”

・ 現役プロヒーロー

・口調もそのままNARUTOの大蛇丸

1話

ピピピッピピピッピッ　ガチャ

「懐かしい夢だったのお」

■ 気持ちのいい朝日ではなく、耳障りな目覚まし時計のアラームで起きたワシは、鬼武辻 頼弥。ピチピチの15歳だ。

■ 聞いたことのある苗字だが、文字が違うし、ワシは不変を求める鬼の首魁じゃあない。

■ 「ふあゝこの世界に転生してから15年　■ 神様は元気でやっとなるかのオ？」

■ 久々に見る夢で、前世のワシを間違って殺してしまった神様のことが少し気になった。

■ そうして、ゴロゴロとベッドの上で転がりながら考え事をしていて、ドタドタと階段を上ってくる音が聞こえた。

■ 足音がワシの部屋の前で止まると、蹴破るかのような勢いで扉が開けられた。

「こらー起きろ頼弥！今日がなんの日だか分かってるのかい!？」

■ そう言っに入ってきたのは、俺の今世の母親である鬼武辻 撫。見た目は完全にNARUTOの綱手だ。

■ 「起きとるし、何の日だかもちゃんとか分かっておる　■ だからそお急かさんでくれ」

「起きてるっていうのは、布団から出てることを言うんだよ。全く、せつかくの受験日だって言うのに」

！

そう、今日は中学3年生の一大イベント。今後の人生を決めるとも言っている高校受験の日だ。

そして、ワシが受ける高校は。

僕のヒーローアカデミアを見たことある人なら絶対に知っているであろう、雄英高校だ。

雄英高校ヒーロー科!!

そこは、プロに必須の資格取得を目的とする養成校！

全国同科中、最も人気で最も難しく、その倍率は例年300を超える!!

国民栄誉賞に打診されるもこれを固辞!! 『オールマイト』!!

事件解決数史上最多! 燃焼系ヒーロー『エンデヴァー』!!

ベストジーニスト8年連続受賞!! 『ベストジーニスト』!

グレイトフル

偉大なヒーローには雄英卒業が絶対条件なのだ!!

はい、というわけで雄英高校到着と。ちなみに、今日受けるのは

ヒーロー科の一般入試、その実技試験だ。

筆記試験はと思うかもしれないが、それは後日、1日開けて明後日に行うことになっている。

「ほお、この目で見るのと創作物とじゃ、やはり違うものじゃの。」

漫画とアニメ、両方で見てきたが、実際に見る方が何倍も迫力がある。

絵ではあるが、何回も見たこの風景を目に収めようと、立ち止まっ

て周りを見渡していた。

もう少し見ていたい気持ちもあったが、大事な試験ということもあり、いそいそと受付まで向かうのであった。

「今日は俺のライブにようこそー!!! エヴィバデイセイハイ!!!」

シーン——

「こいつあシヴィーー!!! 受験生のリスナー!」

受験生達が一同に集まった会場の、ステージでテンション爆高で話しているのは、プロヒーローでありながら、ラジオのMCや雄英の講師をしている、ボイスヒーロー『プレゼント・マイク』だ。

いつも通りの感じで、アンサーを求めたのだろうが、受験ということともあり、緊張している受験生達が、返せるわけがないであろう。

「実技試験の概要をサクッとプレゼンするぜ!! アーユーレディ!?

TEAHHHH!!!
「

シーン——!!

ブツブツブツブツ

誰も返さないとわかったのか、結局自分でアンサーをしていた。テンションは高いが、しっかりと実技試験についての説明をしていた。

簡単にまとめるところだ。

模擬市街地演習を10分間、各自の会場で行い、1P、2P、3

Pと三種・多数の”仮想敵”が配置してあり、それらを行動不能に

してポイントを稼げばいいようだ。

「もちろん、他人への攻撃等、アンチヒーローな行為はご法度だぜ!」

すると突然、1人の受験生が手を挙げながら立ち上がった。

「質問よろしいでしょうか!」

「!」

「プリントには四種の敵が記載されております!」

眼鏡をかけきつちりとブレザーの制服を着た彼は、受付で渡されたプリントを指差しながこの大人数の中、恥ずかしげもなく意見を述べた。

「誤載ごさいであれば日本最高峰たる英雄において、恥ちずべき痴態!! 我々受験者は、規範となるヒーローのご指導を求めてこの場に座しているのです!!」

そういうと、勢いよく振り返り、1人の受験生を指さした。

「ついでにその縮毛の君」

「!?」ビクッ

「先程からボソボソと、気が散る!! 物見遊山のつもりなら即刻、
英雄こごから去りたまえ!」ギロ
「すみません」
クスクスクス

ギロりと音がつきそうなほどの目力で睨まれ注意された、緑の縮毛をした受験生は、萎縮してしまったのか、縮こまってしまった。

「オーケーオーケー、受験番号7111くん。 ナイスなお便りサンキューナ!」

三種の仮想敵の姿しか映っていなかったモニターに、もう一体、映し出された。

「四種目の敵は0 Pポイント！ そいつは言わばお邪魔虫ゴースト！ スーパーマリ
オブラザーズやったことあるか!?

あれのドツسنみたいなもんさ！ 各会場に一体！ 所狭しと大
暴れしている『ギミック』よ！

リスナーには、上手く避けることを、おすすめるぜ！

「なるほど、避けて通るステージギミックか」

「まんまゲームみてえな話だぜ、こりゃ」

「有難う御座います！ 失礼致しました！」

質問した受験生は、手本のような90度のお辞儀をし、席に着いた。

「俺からは以上だ!! 最後にリスナーへ、我が校”校訓”をプレゼン
トしよう」

「「「「」」」」」

「かの英雄ナポレオンⅡボナパルトは言った！ 『真の英雄とは、人生
の不幸を乗り越えていく者』と!!!

更に向こうへ.....

『Plus Ultra』!!」

「それでは皆良い受難を!!」